



理事会だより (1・13)

- 一、年明けに当り池田会長より目出度い話題として、俳人協会四年度カレンダーに会長・近藤久江・村場十五の三人、俳句歳時記(角川第五版)の冬の例句に寶子山京子さん、と紹介あり。(作品は本号12頁に)
 - 二、第58回梅まつり俳句大会は、新型コロナウイルスの感染状況に鑑み主催の観光協会の意向を受け第二部を中止することに本理事会で決定した。会員・選者へチラシ、投句者へ葉書にてその旨通知。投句は二六九組と記録を更新。
 - 三、立春句会の短冊吊しは実施予定、句会はコロナ感染を見極め25日に決定することで会長一任。その後の状況から句会は中止に。
 - 四、第75回小田原梅まつり俳句大会の募集案内を本日本配布。外部へは一四四通発信。
 - 五、来年度の会員把握は2月の理事会へ。
- ・定期総会は4月21日に(木) 18時けやき

「俳句おだわら」10句抄 (653号より)

伊藤道郎 抄出

稲ぼつち最終電車の過ぎし闇	足立 和子
あきつ群れ朝のひかりを散らしをり	高橋 小糸
神の留守監視カメラのそこかしこ	長谷川きよ志
いつだって遅刻のあの子帰り花	瀧本 敦子
買ひ足しに小銭鳴らして秋の暮	加藤まり子
冬林檎かじりて清し骨密度	下平 美子
石路咲いて庭隅の闇解きけり	中村 昌男
羽布団温し出来立てのメロンパン	小林永以子
灯を入れて冬の始めの影となる	田畑ヒロ子
カブールは遠し秋明菊の白	杉山あけみ
芹澤常子 抄出	
こども又更地色なき風の中	川本 育子
冬隣石工の声のよく通る	竹下由里子
薄闇のかすかな鼓動烏瓜	伊藤 道郎
叢雨にひと色となる花野かな	陌間みどり
大花野真青にせまる空一枚	小澤 純子
精霊棚片し六畳間に戻る	高橋久美子
新松子雲低き日の海匂ふ	山口安規子
小間切の女の時間ふとん干す	片野 秋子
煎餅焼く醤油の香文化の日	出澤 洋子
栗拾ひ汚す八十路の膝がしら	山田 照子

年間ベスト一句集

狩の宿自慢話も尽きにけり

汗かいて働く誇り今はなし

行く春や念入りに拭く窓ガラス

もの言はぬ冬木につとと耳あてて

夏薊苳のかへる峠口

風少し雨の少しを山桜

床の間に南天の実と琴柱かな

草庵のどこからとなく秋のこゑ

庭芽吹き初むる制服採寸日

角砂糖溶けゆく午後の冬日かな

老鶯の一声湖の静もれり

茄子の花チャペルの鐘が鳴っている

去年今年遅れたままの置時計

茶毘に付す待合室の蓬餅

白藤の真ん中風が力抜く

藍浴衣針目小さく繕ひぬ

隣駅見ゆる単線竹煮草

青木 孝子

青木たけを

青山 典子

秋山 昇

足立 和子

新井たか志

飯田 愛

池田 忠山

池田 令子

石井きよ子

石井千代子

石井 秀稀

石田加津子

板谷 雅泉

市川めぐみ

市川 好子

一ノ瀬茂代

俳句のみちしるべ

小澤 純子

私の部屋にモダンな振り子の置時計がある。私が俳句を始めたばかりの平成十年の春から休まず時を刻んでいる。この時計は初めて参加した梅まつり大会で思いがけず三位に入賞し、その時に授与された思い出の品である。当時の会長の佃氏のおだやかな笑顔が印象的であった。これが私と小田原俳句協会との出会いで以後今日に至っている。

「俳句の岸辺」の中には亡き母が関わった人が何人も登場してなつかしさでタイムスリップしてしまう。母は昭和五十年代より俳句に親しみ、俳句協会にもお世話になり句会や大会へ参加して生き甲斐としていた。手解きは佐倉東郊氏。「狩」の結社に入会してからは松下康雨氏。曾我の神保蟹平氏や山王の小西敬次郎氏とは俳句四方山話に花が咲き実を楽しそうで、「俳句愛」にあふれていた。そんな母のカバン持ちをしていた。いるうちに私も俳句の世界へ誘い込まれてしまった。

結社を越えての俳句協会を牽引され尚且つ俳句に対する熱き思いで執筆された佃氏。小田原俳壇の歴史を語っている「俳句の岸辺」は、俳句に親しむ私達にとって、「俳句のみちしるべ」と言えるのではないかと思う。

頑固なるものに水虫と雑草

柵を解いてなんだかあめんぼう

梅雨近し背筋伸ばすが老いの行

ふるさとの川で蜆をとったつけ

伊豆の山橋は異界の蛍狩り

夏暁ゆつくり動く城下町

透かし見るワイングラスの夕紅葉

山背風むかし女衞の来し里に

チベットの高台から来た風である

夏光^{げこう}して焼夷弾の夷の字かな

そのうちと文の手付かずちゃんちゃんこ

温め酒胡坐は犬の指定席

紋付の空倍^{うらぶし}子色や光琳忌

鈴虫の夜全開の厨窓

長くつは十四センチかたつむり

白梅に母あり斧に父のあり

手に余るすかんぽ抱へ無位無官

法要の経おわる鉦桐一葉

もうそれはセクハラですと桃が言う
しらじらと明の明星涼新た

伊藤はる子

伊藤 道郎

井上 和子

井上 良子

岩楯恵津子

岩本ひさみ

植松テル子

内田知江子

大石 和子

大石 雄介

大木 敬子

大沢 年子

大島美恵子

大塚 行人

岡田 典代

岡本 史郎

尾崎 一夫

尾崎 幸子

尾崎 竹詩

小澤 純子

俳句おだわら (1・19メ切り、到着順)

◆小田原鹿火屋 (12・24)

久江報

年忘れこころの奥に残る棘

足立 和子

闘病の友の横顔冬薔薇

川本 育子

柱時計の音の響きや冬の夜

高橋 小糸

人想ふこと多くなりぬ師走星

山崎 悦子

切り株の年輪数多冴ゆるかな

近藤 久江

◆山北 (12・16)

由里子報

生きている限り現役日記買う

和田恵美子

少しづつ濁りだす空冬支度

尾崎 幸子

行間にこめる思いや霜の夜

中山 妙子

これはもうセクハラですか桃が言う

尾崎 竹詩

マネキンの青いセーター脱がされる

石田加津子

井戸水の復旧工事実南天

竹下由里子

◆たけのこ (1・12)

悦女報

荒磯にどんどの火柱高々と

三木 泰子

賀状書く夫の横顔凜々しけり

徳田 公子

まどろめる夫を見守る実千両

小宮 早苗

いつの間に傘寿となりて交わす屠蘇

久津間百合子

毛糸編むひたすら編みて又解き

宮崎 悦女

曲がり角来て凧のどんづまり
 目が合わぬようペットシヨップの仔猫
 紗羅の花諸行無常の雨に散る
 盆花が田んぼの隅で迎えてる
 夏夕べ物思ふ時母思ふ
 前向きに並ぶ野良着や豊の秋
 枯野道歩幅大きく歩きだす
 今生は二病と暮らす鳳仙花
 病む地球の呻き声とも慕鳴けり
 走り茶や富士の湧水汲み行かん
 道たずね道連れとなる冬帽子
 荒梅雨や畏敬と畏怖の中にある
 夏萩やはんなり返す京ことば
 入賞の知らせが届く小春の日
 一枚の届かぬ賀状気にかかり
 コロナワクチンありやなしやの半夏生
 秋風を追いつ追われつ足のりハ
 城跡の花満開の昏みかな
 帯留の色そのままに返り花
 水瓶座運氣上々女正月

小澤 園子
 小野 菊土
 香川 花子
 風間 秀泰
 片野 秋子
 片野 節子
 勝木 澄子
 加藤 幾代
 加藤かほる
 加藤 健治
 加藤 富江
 加藤 春江
 加藤まり子
 加藤れい子
 門松 鳳文
 神山つとむ
 川合 昌子
 川本 育子
 河本 純子
 菅野 英余

◆春野(12・19)

きよ志報

年惜しむ遠くに風の鳴つてをり
 近松忌塗り直したるルージュかな
 実南天眠れる白を起こしたる
 のつけから捨てる捨てない年用意
 霜柱踏むや地霊がこゑ発す
 雨あがる狐火見しといふ小路
 吉良の忌や納屋に一縷の明り取り
 ◆こよろぎ(1・13)
 倒木へ足掛け跳ぶや虎落笛
 たちまちに雪のつつみし峡十戸
 三つ四つつつじに赤き返り花
 ◆香雨・梅ごち(12・19)
 目の前に海ある暮し冬ぬくし
 ねんねこの夜泣きだんだん遠くなり
 省くこと日ごとに増えて年用意
 饅頭をついでに買うて年用意
 重箱に取り皿そろへ年用意
 をさなごのつぶらなひとみ龍の玉
 枯菊や捨つるに忍びなき香り
 刃を入れて紅弾けたる冬林檎

秋山 昇
 伊藤はる子
 内田知江子
 尾崎 一夫
 瀬戸 悠
 二見 和江
 長谷川きよ志
 つとむ報
 板谷 雅泉
 植松テル子
 神山つとむ
 忠山報
 肥後ちさこ
 関戸わよこ
 青山 典子
 門松 鳳文
 吉田 百代
 吉田 康雄
 陌間みどり
 小澤 純子

夕焼や企業戦士の古団地

前方後円墳扉は固し青葉閣

コップ酒おひとりさまの花見です

切り岸を大きく廻り燕来る

陽の匂ひ余るほど浴び干大根

今日一ト日ひとりりの世界冷奴

地下足袋の足取り軽き今朝の秋

匂を拾ひもみぢ葉ひろひ永観堂

龍の落し子脊柱管狭窄症ならむ

青空に煙あそばせ秋刀魚焼く

サイダーの体内トンネル突つ走る

退院の父に迂回の桜道

風の声水のこえ聞く春野かな

亡き人の最後のメール夏椿

龍天に鹿火屋の迎ふ百周年

われもまた風船かづら後生楽

子規囲み胡座立て膝懐手

父と子の小さな旅や秋高し

梔子の白さに勝る香りかな
秋の虹ニユートリノの過ぎるかな

北崎 修

北村 文江

木村 和彦

木村 幸枝

木村美千代

久津間百合子

久保寺トミ子

神野美代子

小島ノブユキ

小瀬村信子

小林永以子

小林 環

小宮 早苗

近藤 絢子

近藤 久江

西賀 久實

齊藤 桂

齊藤 静

坂入清四郎
佐々木重満

冬至はや上枝下枝ほつえしづえに息吹くものい

◆沈丁(1・8)

寶子山報

池田 忠山

雪降れば子供ばかりがはしやぎをり

中野 文子

喜びを分かつ仲間や福寿草

若村 京子

写経するひとり正座に冬の月

柳澤ミサ子

腹の子に見せたき花や福寿草

田中 恵一

難病の子らに救ひの福寿草

河本 純子

福寿草お揃いの傘並べ干す

瀧本 敦子

主婦といふ役わり返上福寿草

勝木 澄子

呑むほどに五黄の寅の父かな

菅野 英余

賑やかに集へる年よ福寿草

高井 幸子

家系図に長命多し福寿草

片野 節子

福寿草どこに置いても笑つてる

寶子山京子

◆零(1・20)

史郎報

今年また初日に祈る「今年こそ」

青木たけを

竜宮を去るわびしさの四日かな

伊藤 道郎

初日の出亡夫と一緒に光受け

井上 良子

天空に光漲り初日の出

川合 昌子

少子化に世の常ならず櫛や

佐藤 正子

初日受く一筋明し相模灘

中村 裕子

福藁敷く山の小さな隠れ里

野川木一路

録画には地震のテロップ弥生尽

秋桜欲望薄れそれなりに

朝顔や企業戦士の靴の音

琵琶負いて影曳く釣瓶落しかな

少年と保護司の間扇風機

七曜の朝の光や七変化

春かなし赤べこ首を振りつけ

ざる菊の園の彩香いろかに立ちすくむ

隠れ家のような図書館文化の日

賢治忌や万年筆の青インク

凧に肩いからせて大鳥居

水鳥の集つて居るささら川

微生物に囲まれてゐる不安

あるがまま生きる喜び野紺菊

須佐之男の荒息櫻芽吹くなり

胸奥に凝る寂しさ野火走る

沈む日に紫紺の山や牡丹鍋

生きる場所やつと見つけた帰りに花

守衛室灯る勤労感謝の日
生きてゐてこそその至福や新酒汲む

佐宗 欣二

佐藤 正子

下平 美子

庄司 下載

杉崎 せつ

杉本 久子

杉本あけみ

鈴木久美子

須田 聡子

須田 晴美

関戸わよこ

関根 琉子

瀬戸 正洋

瀬戸とみ子

瀬戸 悠

瀬戸 りん

芹澤 常子

高井 幸子

高橋久美子
高橋 小糸

七草や入院の師にポリグリップ

◆みなみ(12・18)

かほる報

不器用の手にあるリズム糸編む

捨てられぬ父のセーター残る香よ

明日こそ素直になろう冬満月

脱ぎ捨てし我がセーターや日の匂い

園児みな白セーターの鼓笛隊

蒲団干す母の重きを今に知る

沈黙の世界に入りし冬木立

仏花選る暮れ早き日の道の駅

白秋の住みし古刹や銀杏散る

粉砂糖振りかけたほど今朝の霜

◆実のり(1・13)

たか志報

お湯わかし荒神様の飾り取る

書初の墨たつぷりと書く抱負

神々しき一月の富士嬰生まる

方丈の年礼に立ち高笑ひ

初詣鎌倉宮へ二人旅

初御空酒さか川わゆつくり時はこぶ
紅白のかけひもほどく御節重

岡本 史郎

加藤 富江

豊田 幸枝

市川めぐみ

斎藤 静

加藤 健治

飯田 愛

小瀬村信子

加藤れい子

村上 龍山

加藤かほる

岩本ひさみ

杉本 久子

木村 幸枝

新井たか志

幸子報

大塚 行人

湯本とし子

神野美代子

亀鳴くや片割れ残る夫婦箸

言訳に言訳重ねこぼれ萩

前かごの凹みそのまま秋の蝶

霜降や先づ一碗の白湯を飲む

火取蛾や易者の翳す虫眼鏡

生みたての玉子ふところ明易し

古い先のはなし膨らむ春炬燵

泥葱を皮剥げば無罪なり

土手添ひに綱と見紛ふ秋の蛇

悪相の裸足の客人まろうとであつた

大木の寒気を泳ぎ倒れけり

投葉を小分けにしたる春の星

みどり児の湯を蹴る力柿若葉

木犀や鹿島踊の白浄衣しろじやうえ

取り敢へず嗽手洗ひ初鱈

入道雲羊が虎にやがて吠え

水甕に増えて緋目高白目高

身の内に宿る歲月豊の秋

曼珠沙華大正口マンそのままに
身に入むや「洗心」と謂う父の文字

高橋 正子

高橋みどり

瀧本 敦子

竹下由里子

田下 昌人

田中 恵一

田中 幸子

田畑ヒロ子

田渕 令子

佃 悦夫

出澤 洋子

徳田 公子

豊田 幸枝

鳥海 壮六

中田 笑子

中津川晴江

中根 和子

中根登美子

中野 文子
中村 裕子

洋館の門扉の高く冬薔薇

初雪に胸のときめく卒寿かな

咳込むや八十路に長き夜の闇

初富士の白打掛けを曳くやうに

◆おほる(1・12)

初詣心まろ円みて下る坂

元朝のしじまを開く宮太鼓

目の前にどこでもドアー初枕

温もりし毛糸のガウン師の手編

夢載せて白い航跡冬の空

やわらかな心がもどる三が日

初雪や一夜に変わる庭景色

母の忌やひときわ薫る水仙花

初雪や絵となる山河窓に見る

初日の出富士山頂を輝かし

良き言葉選んで綴る初日記

初鏡女神の山を映す五湖

意気込みの一字筆に初硯

年賀状生きる力を運び来る
初夢やクレオパトラと楊貴妃と

加藤まり子

久保寺トミ子

田渕 令子

田中 幸子

昌男報

石井きよ子

石井千代子

小野 菊土

香川 花子

風間 秀泰

加藤 春江

坂入清四郎

瀬戸とみ子

高橋みどり

中津川春江

中根登美子

中村 昌男

廣田 悦子

二上 光子
横塚 昌平

重満報

忘れ物して来たような暮の秋

中村 昌男

汲む水に引かれ睡蓮ゆらめけり

中山 妙子

頻浪しきなむに切込む日差南洲忌

中山智津子

それぞれの人生春の駅ピアノ

野川木一路

秋袷母となり知る母のこと

陌間みどり

長き夜は亡き寂聴の恋談議

長谷川きよ志

蝌蚪ふるへ水に喝采あるごとし

島 梅乃

マドラーに欲しき氷柱のひとつかけら

肥後ちさこ

うららかやないしょ話は爺まごと孫娘

廣田 悦子

大花野悟空になり風になる

二上 光子

一面の敗荷一面の無音

二見 和江

初蝶や土に研がるる鋏の先

古屋 徳男

地球くまなく電波は走る菊枕

寶子山京子

十五夜まで黙つていよう「愛してる」

穂坂志げる

上げ潮のきらめく水面秋の浜

三木 泰子

泥団子つるつる艶の梅雨晴間

蓑宮 わか

冬うらら退役犬の目の虚ろ

宮崎 悦女

草餅や昭和を生きた母の味

村上 龍山

あやかりたし絶好調の夏草に

村場 十五

葭戸入れ総領の愚痴聞いてやる

百川 秀子

日脚伸ぶ丸くなりゆく風の角

石井 秀稀

何故か恋し古歌こかしよさ所作ことの葉春灯し

井上 和子

マスクして洛中洛外図を遂おわる

佃 悦夫

去年今年吉凶禍福の正弦波

佐々木重満

◆鷹(1・19)

十五報

回診の小児病棟サンタ服

青木 孝子

足許を犬の息過ぐ返り花

西賀 久實

春隣削る鉛筆Bばかり

佐宗 欣二

縁側に見上ぐる機影春近し

須田 晴美

着ぶくれて観客席に缶コーヒー

中田 笑子

客演の宇多田ヒカルや小夜時雨

百川 秀子

霜夜更く道路工事の重低音

山崎美知子

土間蹴りて突切る矮鶏や竈祓

庄司 下載

箒の癖蒸気に直す節季かな

瀬戸 りん

冬耕や夕日遠嶺を雄々しくす

高橋久美子

元朝や波白く囁む烏帽子岩

中山智津子

友がらの笑窪なつかし福寿草

齊藤 桂

潤底の細き流れや梅探る

芹澤 常子

幸せを売ることポインセチア売る

島 梅乃

寒鴉とび立ちてより森黙す

山口安規子

歳晩や駅なかピアノ曲速し

大木 敬子

正座の手置きたる膝や蝶生る 守屋 まち

ひまはりに呑みこまれてる縄電車 柳澤ミサ子

包丁に青空うつり春祭 山口安規子

大手門ゆるり開かれ菊花展 山口 千代

十葉を干して息災なりし日々 山崎 悦子

翻車魚に広き水槽日脚伸ぶ 山崎美知子

朴の花こころを見せぬ高さかな 山田 照子

地下足袋も墓石も焦げる谷戸残暑 湯本とし子

いつの日も別れはふいに黄落期 横塚 昌平

海見ゆる丘の日溜り鼓草 吉田 百代

朱の橋の影のゆるがず水の秋 吉田 康雄

夫婦して蓬摘みたり日の恵み 米山 翠

小さき駅出迎へありや百日紅 來田 新子

ランドセル走つて春の風になる 若村 京子

飛行機の音なき高さ小春の日 和田恵美子

(投句一五二名)

理事会日程 (各月第2木曜日)

3 / 10、4 / 14

マスクして機敏なうごき忘れをり 大島美恵子

秒針に遅速はあらず去年今年 北崎 修

ピオロンのピッチカートやシクラメン 田下 昌人

濠に向く甘味処や浮寝鳥 中根 和子

早梅や足湯に和む下午の庭 加藤 幾代

冬薔薇夫の写真機持ち出せり 高橋 正子

弟に姉が教へる独楽廻し 守屋 まち

岩肌に水ほとばしる根白草 米山 翠

レノン忌の平和な空や冬牡丹 來田 新子

畦道の春菜摘みたる親子かな 大沢 年子

地下鉄のA1出口初芝居 片野 秋子

着ぶくれて給料前のボンカレー 小林 環

畑に立つ父の横顔焚火燃ゆ 下平 美子

初午や雲にしたはれ法の山 杉崎 せつ

生活に追はれし我や春近し 関根 琉子

はばかりず大声出せり冬の海 鳥海 壮六

日面を雀発ちたる年賀かな 古屋 徳男

水鳥やことさら持たぬ死生観 村場 十五

◆無所属

はらからと膝をゆるめて女正月 小林永以子

一ノ瀬茂代

城苑俳句・春の部

(合同句集第十二集39～53頁より近藤久江抄出)

梅短冊噛んでほぐして筆の先
 雪解水日本海へと蛇行せり
 手を開き宝物よと桜貝
 桜祭り蕾啞えた小鳥いて
 お手玉のひいふうみいよ梅日和
 風そよぎ立春大吉貼る明日
 田の神の笑ふがごとし春の水
 誰一人乗れぬは淋し花筏
 恐竜の卵が孵った露の臺
 花種を蒔きて单身赴任かな
 春の月己の影に背を正す
 菜花摘む浅き光の中にいる
 春雨や山少しずつ色かさね
 山笑ひをり天井は特上で
 ふんわりと座ってみたい春の雲
 如月やぱかつと開ける城最中
 暈這ふ朝の香煙春立ちぬ
 白き香を放ちて今朝の野梅かな
 水温む鯉の背鰭の水尾ひきて

加藤れい子
 門松 鳳文
 神山つとむ
 川合 昌子
 川本 育子
 河本 純子
 北崎 修
 北村 文江
 木村 和彦
 木村 幸枝
 久津間百合子
 國島 五月
 久保寺トミ子
 小島ノブヨシ
 小瀬村信子
 小林永以子
 小林 環
 小宮 早苗
 近藤 絢子
 (12頁へつづく)

元朝の山の曙尊びぬ

百程は数へあきらめゆりかもめ
 ブロンドの髪にしようか若き年
 切り捨てる過去と未来や絵双六
 新春の走者の襷海明り
 免許証返納つくづく大寒
 冬晴れの釘打つ音におとこ寄る
 はるばると銘菓携え年賀かな
 歴史ある松の切株ひこばゆる
 潜るもぐる水鳥たちの朝餉かな
 蟾蜍は懸垂が大の苦手です
 へっちんのくさめの響く腰痛に
 人生に上がりはなくて絵双六
 凵となるか靴紐ほどけそう
 シリウスを磨き上げたり寒の天
 枇杷の花みんな吹いて回ったり
 冬の河三十羽編成んん鴉
 寒月光スポットライトのモノの庭

鈴木久美子
 出澤 洋子
 岩楯恵津子
 瀬戸 正洋
 須田 聡子
 田畑ヒロ子
 穂坂志げる
 山田 照子
 木村美千代
 岡田 典代
 小島ノブヨシ
 蓑宮 わか
 小澤 園子
 杉山あけみ
 山口 千代
 大石 雄介
 大石 和子
 北村 文江

俳句協会会員を募集しています。お知り合いの俳句の仲間をお誘い下さい。(年会費三千元、郵送費)

杉本久子

(令和3年11月号より)

落葉掃く朝餉の前の一仕事

久保寺トミ子

昨夜は困一番が吹いたのでしょいか。朝の庭や家の前の道路には、庭木の木蓮の葉や桑の葉、蔦の葉などの落ち葉がいっぱい落ちています。竹箒で落ち葉を掃く音、笑顔で朝の挨拶を交わす様子が浮かびます。掃除が終わりきれいになった家の周りを見ていると、清々しい気分です。

そんな朝の一仕事を終えた作者は、ゆっくりと朝食をとります。私の家も隣近所に飛んで行った落ち葉の掃除が大変なので、この句に共感しました。

出澤洋子

(令和3年11月号より)

文机を持たぬ半生草の花

中根 和子

卒業してから自分が机とはおさらばしている。文字を書く時は、食卓の上の物をチャチャツと隅に寄せて空間を作っている。今日はたまたま犬の散歩の時に摘んできた野菊やら赤のままやらを小さな花瓶に活けてある物を、食卓の上に置いてみた。一息ついた。立派な文机になって、句作にもはずみがついた。

そんな私にはとても共感できる一句でした。

青木たけを

(令和3年11月号より)

籠る日をたんたんと生き豊の秋

勝木 澄子

コロナ禍で巣籠状態が続いた。私はもう辟易である。しかし作者はたんたんと暮らしたと言う。やはり俳人なのだ。あの高浜虚子は「俳句は戦争も第二芸術論も何の影響も受けなかった」と答えたそうだがそんな心境なのだろう。大虚子を持ち出さなくても心から好きなものがある人はその道に邁進していれば常に心穏やかな人生を送れるのだ。そして今や収穫の秋である。人生の稔りの秋を確信されたのだろう。私もそうありたい。

山崎美知子

(令和3年11月号より)

冬瓜のつべこべ言はぬ面構え

北村 文江

一抱えもあるほどの冬瓜を、毎年農家より頂戴する。何と立派なこと。だが調理するには覚悟がいる。容易に庖丁の刃が入らない。大きいので一度に食べきれない。そんなことは知らないで、でんと置かれた様は堂々として寡黙なのだ。よくぞきつぱり言ってくれた。胸がすーとする一句である。

第75回小田原桜まつり俳句大会

第一部 作品募集

兼題 「桜又は花」「雲雀」（いずれも傍題可）

各一句一組

未発表作品に限る

締切 令和四年二月二十五日（金）必着

整理費 一組に付き千円（句稿に同封、何組でも可）

投句先 〒258・0019 足柄上郡大井町金子一四一

小野菊土宛（電話〇四六五一八三一〇八八〇）

*作品は原稿どおり印刷します。

選者 協会役員及び各地有力作家（投句者に限る）

賞 県知事賞以下二十位まで 選者特選賞六人

第二部 俳句大会

日時 令和四年四月三日（日）

会場 小田原市民交流センター（UMECO）

受付 十二時 投句締切・十三時 開会・十三時

整理費 五百円（呈飲料）

席題 春季雑詠二句 総互選

賞 市長賞以下五十位まで 参加賞

（主催）小田原市観光協会（主管）小田原俳句協会

（後援）各地俳句協会

*会場は現在のところ飲食可能ですがなるべく各自、食事を済ませてご参集ください。マスク着用など感染症防止対策は継続します。

（10頁よりつづく）

改元の令和の鼓動桜咲く

摘みし菜を青く洗ひぬ春の水

どこまでも白き砂浜春浅し

クレソンに日差しの届く春の水

夜桜や太鼓に浮かれ踊り出す

早蕨やゆつくり移る牧の牛

春暁やダビンチ人体図起き上がる

花三分老いて母校に沖眺む

中庭の白衣が眩しリラの花

胸元は風の遊び場春シヨール

計るたび縮む背丈や露のとう

*

俳人協会カレンダー

麦踏の一番星へ折り返す

風鎮のことりことりと秋深し

円相の輪の中ををり蠟八会

角川俳句歳時記第五版冬の部（背蒲団の項）

負真綿しんそこ家に仕へけり

寶子山京子

近藤 久江

西賀 久實

齊藤 桂

齊藤 静

坂入清四郎

坂元 一義

佐々木重満

佐宗 欣二

佐藤 正子

澤口 文子

下澤 操子

池田忠山（二月）

村場十五（十月）

近藤久江（十二月）

新規の加入者について、各グループ代表又は総務部長

（佐々木重満 ☎〇八〇―一二四七―八八七八）へお

申し出ください。